

かねのわらじ はこねやまななおんせんえのしまかまくらめぐり

## #41 金草鞋 箱根山七温泉江之島鎌倉廻

作者：十返舎一九（(じっぺんしゃ・いっく 1765-1831)

刊行：天保4年（1833）

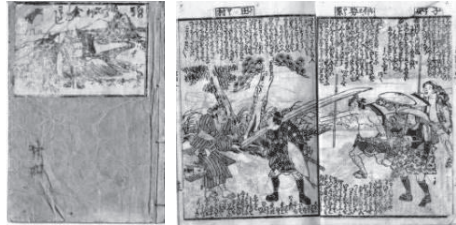
※『江戸を読む』より転載



### 📖 解題

#### ■ 内容

「方言修行」(むだしゅぎょう) という角書を持つ『金草鞋』シリーズのうちの一編で、一九の没後に刊行された。『金草鞋』は文化10



[K97/130]

年(1813)から天保5年(1834)にわたり刊行された、十返舎一九のベストセラーである。長期にわたり多数の編が刊行され、その間に各編をまとめたり、順序を入れ替えたり、刊年を削ったりということが行われ、また初摺本が確認できないものも多く、編次については諸説があり定かではない。本書についても、第23編とする説と第23編と第24編の2冊本とする説などがある。ちなみに当館所蔵本の柱には「わらじ廿四へん」と書かれており、巻末には「西国道中 金草鞋廿五編 全六冊 近刻」という予告がのっている。

東海道三島宿から箱根・大山を経て江の島・鎌倉・金沢をめぐって戸塚に至るまでを、洒落や冗談を言いながら歩いていく旅人2人の姿を追いながら描いている道中紀行であり、社寺、古跡などの名所案内でもある。

#### ■ 作者

十返舎一九は江戸時代後期の戯作者。本名は重田貞一。通称、与七。十返舎の号は香道の十返し、一九は幼名の市九によるという。十偏舎, 十偏斎, 重田一九斎とも称した。駿河府中(現・静岡市)の同心の子で武家に奉公したが、やがて大坂で浄瑠璃の合作者として文筆活動を始める。

寛政5年(1793)江戸に行き、やがて書肆蔦谷重三郎の食客となった。

寛政7年(1795)黄表紙『心学時計草』などを刊行し、以後毎年20種近くの黄表紙を刊行した。享和2年(1802)に刊行した『東海道中膝栗毛』は大好評で、文政5年(1822)まで続編を刊行し続けることとなった。洒落本、人情本、読本、滑稽本など様々な分野を手がけ、多数の著作を刊行している。曲亭馬琴とともに執筆料だけで生活を維持した最初の職業作家であったとされる。天保2年(1831)没。墓所は東京都中央区の東陽院。

絵師は歌川国安とする版もあるが、当館所蔵本には北尾美政画と書かれている。生没年等詳細はわかっていない。

## 📖 本文を読む

<翻刻>

「方言修行金草鞋第二十三編」(『続帝國文庫』第33編 博文館 1909)

[918/8/33] ※挿図はなし

「方言修行金草鞋第二十三編」(『十返舎一九全集』第3巻 日本図書センター 1979) [918.5/24/3] ※『続帝國文庫 第33編』の複製

「箱根山七温泉江之島鎌倉廻金草鞋」(『十返舎一九の箱根江の島鎌倉道中記』鶴岡節雄校注 千秋社 1982) [K99/39]

「金草鞋」(『神奈川県郷土資料集成』第10輯 神奈川県図書館協会 1983) [K08/1/10] [K97/46] [C3.3 ㌘10]

「箱根山七温泉江之島鎌倉廻金草鞋」(『鎌倉市史 続編』第1巻 吉川弘文館 1985) [K21.4/4-2/1] ※腰越～離山まで所収 挿図はなし

## 📖 参考文献

「解題(金草鞋)」(『神奈川県郷土資料集成』第10輯 神奈川県図書館協会 1983) [K08/1/10] [K97/46] [C3.3 ㌘10]

林美一「方言修業金草鞋の編次について」(『方言修行金草鞋 初編』河出書房新社 1984) [913.5R/23/2-1] [K97/48/1]

「解説 26 箱根山七温泉江之島鎌倉廻金草鞋」(『鎌倉市史 続編』第1巻 吉川弘文館 1985) [K21.4/4-2/1]